Vol.17　Xm7(♭5) コードの構造を確認してみる　～その 1～

では、vol.17、始めていきましょう。

XM7、Xm7、X7 ときて、基本のアルペジオでは最後となる Xm7(♭5)です。

この 4 種で、ダイアトニックコードのコードトーン・アルペジオが全て弾けることになりますね。

多くの場合、メロディーの構造と言うのは、スケール的な動きと、コードトーン的な動きのミックスなので、過去にやってきたスケールの知識と組み合わせると、フレージングの基礎が出来上がっている状態になります。

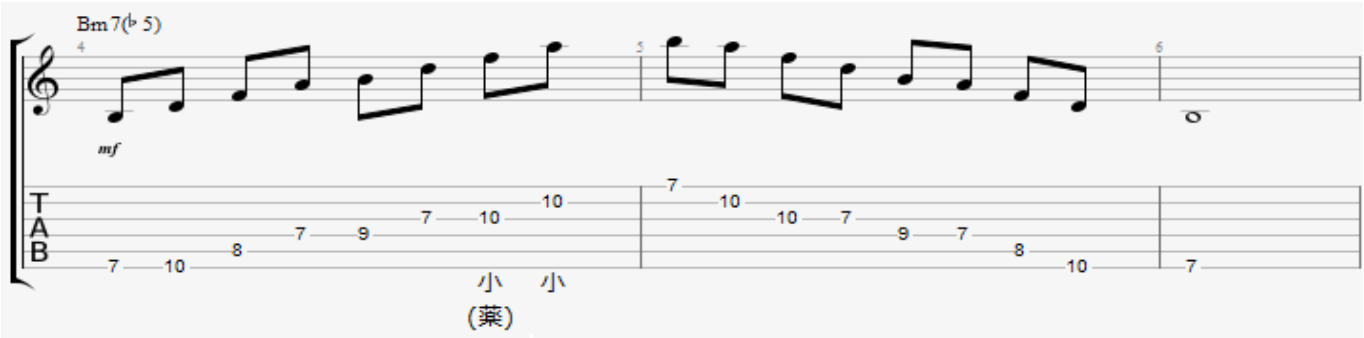
今回の Xm7(♭5)は、これをそのまま使う事は、以前の 3 種よりも少ないと思いますが、ディミニッシュ系のものに構造が近いので、そちらと関連付けると意味が分かりやすくなるでしょう。

では譜例ですが、ルート(トニック)は B 音で、スケールとしては B ロクリアン、コードは Bm7(♭5)をベースに見ていきましょう。

B ロクリアンは、構成音が C メジャー(アイオニアン)スケールと同じですね。なので Bm7(♭5)の構造は、B(root)、D(m3rd)、F(dim5th)、A(m7th)になります。

いつもの様にボディ側とネック側の両方に進むパターンを弾いて行きましょう。

譜例 1



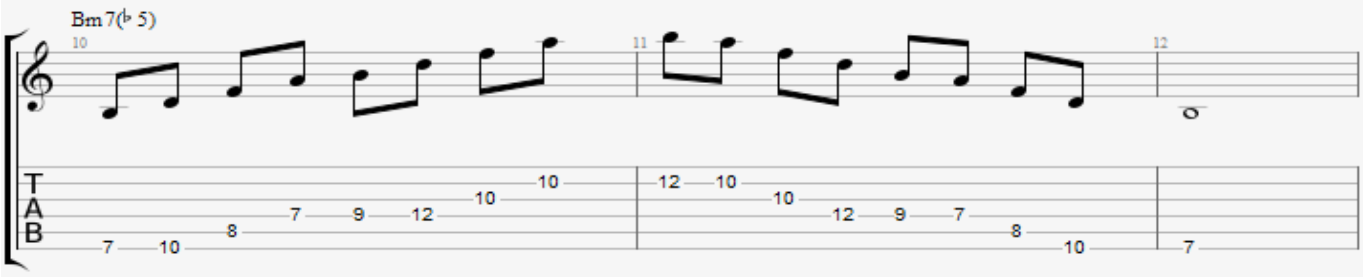
このポジションの 3 弦 10 フレットの F 音は、2 弦 6 フレットに進んでも良いのですが、そちらは後の譜例で使うので、あえてこの様にしました。

小指のジョイントが難しい場合、ストレッチになりますが、指使いの指定にある様に、薬指で弾くのもありでしょう。

ポジションの移動を入れる場合、以下の様に弾くのもありですね。

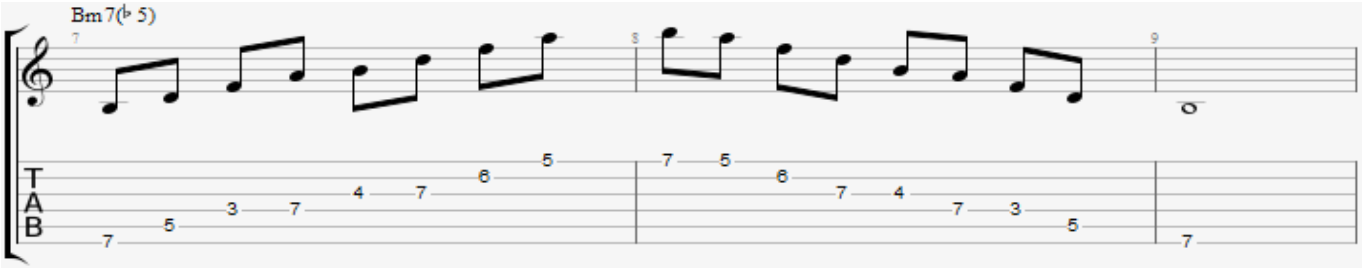
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 2



これは上の譜例を、1 オクターブごとにポジションを移した場合の弾き方です。4 弦 7 フレット→9 フレットの部分は、スライドでも、指をパッと押さえ変えるのでも、どちらでも構いません。

譜例 3



今回の譜例では、これが一番弾きやすいかもしれませんね。

Xm7(♭5)にはあまり馴染みが無いかもしれませんが、構造的には、Xm7 と 1 音違うだけなので、そちらと見比べながら弾くと把握しやすくなるでしょう。

ではまた、次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved